

地方からの視線

やっと春が来て、今は目も鮮やかな新緑の季節です。山つつじも満開になりそうです。夜はカエルの合唱が聞こえてきます。

今回は地方のマスコミについて書きます。

私は、東京では全国紙を読んでいました。ここでは「河北新報」を読んでいます。ちなみに宮城県で1番発行部数が多いのは、「河北新報」です。私は次のことに気がつきました。

全国紙は、日本や世界の政治や経済・社会について報道します。どうしても記事が第三者の目になりがちです。権力に対しても弱腰です。一方、地方紙は地方の出来ごとについて、地元からの目で記事を発信します。現在の東北は、①被災地の復興と被災者の支援、②TPP 交渉への参加反対、③反原発という3点で、現在の政治の縮図です。地方紙は地方からの視点で、東京での政治について、かなり批判的に報道しています。

私は、全国紙を読んでは、政治に対して怒りがわき、地方紙の被災地や被災者の記事を読んでは涙ぐみます。(歳を取ると、なぜか喜怒哀楽が激しくなります。)

最初に、地方のラジオ局の話をしてします。3・11の大震災での岩手放送(ラジオ局)の活躍は本にもなっています。停電になったので、避難所でテレビを見る事ができません(発電機があれば可能ですが)。唯一、携帯ラジオだけが、生放送を聞くことができました。

岩手放送のすごいところは、死者ではなく、生きている人の名前を放送し続けたことです。死者については、警察や自治体で教えてくれます。しかし、生きている人がどこに避難をしているのかについては、教えてはくれません。岩手放送では、記者達が各地の避難所を回って、避難をしている人のリストを作ってそれを生放送しました。また、避難をしている外国人のために、ボランティアの人の手を借りて、英語や中国語でも放送しました。

また、“被災地に携帯ラジオを贈ろう”というキャンペーンを放送しました。放送局には、2011年3月21日現在、800台の携帯ラジオが寄贈されました。それを局の社員達が手分けをして、避難所に届けました。一方、テレビのローカル局は、東京にあるキー局との関係で、被災地の現状について、生放送を続けることができませんでした。

地方の新聞も奮闘しました。停電をして、輪転機は回りませんでした。しかし、1日も休刊させてはいけないということで、「石巻日日新聞」は、模造紙に記事を書きました(学校の壁新聞です)。「三陸日報」は、パソコンでA4版に記事を書きました。そして、記者や配達員達が各地の避難所に新聞を張り出して回りました。正に「新聞記者魂ここにあり」です。

さて、地元の地方紙「三陸新報」に、「一緒にがんばる復興の助っ人たち」というシリーズがあります。今回（5月10日付け）、私のインタビュー記事が掲載されました。（少し恥ずかしいですが）

職場では、私の記事の掲載が社会面では無かった事に、安堵しています。

私は、ハタと気がつきました。“これでもう気仙沼から逃げて帰ることが出来なくなってしまったことに！”

【参考文献】『その時、ラジオだけが聞こえていた』 編集荒蝦夷 竹書房刊